
ええ、どうせ...雑魚のCランクですよ！

皇帝の宿命

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええ、どうせ…雑魚のCランクですよ！

【Nコード】

N4092F

【作者名】

皇帝の宿命

【あらすじ】

人類は『能力者』と『人工能力者』と『人類』と三つに別れたけど、余り関係ない。

プロローグ

人類が生まれて数億年が経ち、人々は勝手に進化とかしちやってさ。気付いたら、『能力者』と呼ばれる人間が出てきて、最初は当たり前のように批判があつたりして、『能力者』を嫌う奴等も当然でたわけ。

『青き○浄なる世○のために』とか言う奴等は、さすがに出て来なかつたらしい。

漫画や小説のように、『能力者』が英雄になつて世界を救つたり、悪者になつて世界征服なんて…ありえねえ。

まあ…色々あつて、人類は『能力者』を受け入れた。

そして…長い時が過ぎたり過ぎなかつたり、人類のほとんどが『能力者』になつたり、なれなかつた奴は『人工能力者』となつたとさ。

さて、この話は『能力者』の中で弱小のCランクの主人公とした、
ありがちな物語だけど、頑張ります。

おっと、自己紹介が遅れたな。

俺は『カンタトモキ神田知樹』、天然の能力者で能力は…『ソニックウェーブ又
はソニックブームを出せる』だけど、地面に落ちた木葉を動かす程
度だったり、鎌イタチぐらいの能力…はあ〜せつねえ（泣）

プロローグ（後書き）

更新遅いです

第一話：『雑魚同盟』（前書き）

主人公登場とあほ三人と親友二人登場と後雑魚同盟

第一話：『雑魚同盟』

どうも、今学校で独り寂しく机に突伏している『神田知樹』です。

ごく普通にありそうな学校でも『能力者』の差別がある。

それが、『ランク制度』…名のとおり『能力者』にはランクがあり、EからSまである制度で、一番下のEランクはないと同じだ。

理由は簡単さ、赤ちゃんや小さな子供を指してるからと、小学校に入ると自然にEランクからCランクに上がり、後は自己の能力と頑張りでランクが上がってゆく。

あげる方法は、二つあると言われる。

まず一つは能力次第だ…能力が強力なほど上に弱ければCランクだ。二つ目は、バトルアクションと呼ばれる能力者同士の戦いで勝ち続けるとランクが上がる。

と言われるが、他にも色々とあげる方法はあるらしいが、俺は知らない。

俺が通っている『〇〇〇高等学校』の〇〇〇は三丸と読む、決して手抜きではない。

その三丸高校一年A組が、俺のクラスだけど、本音を言えば…居にくい。

だって、しょうがないだろう…現状では俺以外はみんなBランク以上だから。

いじめか？新手のいじめか、これは？と机に突伏して悲しく嘆いていたら。

「よゝ知樹」

うわあ、朝から嫌な奴のヴォイスが聞こえる。
顔をあげたら…

「よう、この知樹君よ〜」

目の前には金髪のおカッパとその横には、キツネ目とゴリラがいた。
ゴリラと言っても、ゴリラみたいな奴じゃなくて、人間みたいなゴ
リラが正しい奴。

一応、紹介しておこう。

嫌味でツリ目の金髪おカッパは不童子彰フトウジヤキヲという名前のおカッパで、
何回か俺の妹に告白したらしいが断れたのを、俺のせいだと言いつ張
る。

で、隣りにいるキツネ目は説明が面倒いから、○ネ夫みたいな奴で、
ゴリラはゴリラだ。

名前は…確か…あれ？

「狐山狸だ！」
キツネヤマタヌキ
と狐。

「おりやは、剛田山猿だあ」
ゴウタヤマザル
とゴリラ以下のゴリラ。

そうそう、そういう名前だったな…いつも、オマケのAとゴリラA
と覚えていたからな〜。

いってえ、本気で殴らなくてもいいだろ。
水で冷やさなきゃな…と思い、立ち上がり手洗い場の鏡を見ると、
頬は見事に腫れ上がっていた。

実はあの後、アイツらに男子トイレに連れて行かれ、リンチにあっ
た。
当たり前のように誰も助けるはずもなく、フルボッコにありました。

ハンカチを濡らし、頬を冷やししながら、教室に向かっていたら、廊下で一生懸命に机を拭いている。

「おはよう、祇園」

俺の親友が、健気に汚された机を拭いていた。

「おはよう、知樹」

と挨拶を笑顔付きでかえしてくれたのは、俺の親友一号で綺麗な碧い髪とこれまた綺麗な緑の目が特徴の中瀬祇園^{ナカセキオン}だ、どんな奴かというスツゲーいい奴！

何故なら、今さつきから懸命拭いているよこれた机は、俺の机だ。

前、しなくてもいいって言った…

「だって、知樹は僕の大事な親友…その親友が困っているなら、助けなきゃ」と満面な笑顔で言ってくれた、俺が女か祇園が女だったら、確実に惚れたぜ。

祇園の優しさに嬉し泣きしてたら、肩を叩かれた。

誰だよ、人がせつかく中々流さない涙を親友のために流しているのに。

振り向くと、肩まで伸びた黒い髪が特徴の親友二号の

「おはよう、田山」

「おう、知樹」

とまた笑顔で返したが、これは俗に言うハニカミというヤツだろうか？

親友二号の名前は大堀田山、オオホリタヤマ面白い奴。

何処が面白いかと言うと、苗字が名前なところかな。

こいつも良い奴だ。うん

クラスの奴等は俺達三人をこつよぶ…『雑魚同盟』と。

第一話〜完〜

第二話：『妹はBランク』（前書き）

見た目は小学生、頭脳は高校生…その名も神田愛！！
ランクはB
ランクだったり、貧乳だったり。

第二話：『妹はBランク』

皆さんどうも、神田知樹です。

俺達雑魚同盟は日々、いじめにあっています。（祇園は対象外）靴を隠されたり、上靴に画鋲が入っていたり、プリントが来なかったりと…結構イジメにあっています。

これが又、質が悪いことに先生までもがグルなところだな。俺達がランクが低い事が原因だろうな。つたく、なんて心が狭いんだろう…とか思っても、そういう社会と法律があるから、しゃーない。

けどね、けどね…何やったけ？

あゝそうそう、俺の妹は俺のことをこつ言っんだ。

「おい、雑魚兄貴」

こつ言われるんです（泣）

まあ…ちよつとした愛情表現かな？

「雑魚兄貴、パン買って来て」

違ふみたいですよ…この子、カンダアイ神田愛は心の底から、俺を下に下にそりやもう奈落なみの下の人間と思ってるだろう。

ここで、紹介しよう。

神田愛、俺神田知樹の実の妹で能力者だ。

能力は『自然操作』だ、名のとおり自然を自由自在に操作出来ちゃう能力。

ランクは俺より…二つ上のBランク。

でも、胸と身長はちっさいですよ。

この前、なんてラーメン屋にいったらさ。

「しっかりした、小学生ねえ〜」とラーメン屋のおバチャンに言われて、すごい苦い顔をしたり、三丸高等学校の近くにある祭壇小学校の教師に

「何処に行くんだい？君はこっち」と勘違いされる程ちいさい妹君。

そんな事言ったら、間違いなくバットエンドだろうな。

そうそう、妹といっても双子だ。

周りからは、

「腹違い」と言われる程似てないし、身長もまったく違う（俺は1

68、愛は132cm）。

第二話：『妹はBランク』（後書き）

読んでくれるだけでも嬉しいです

第三話：『雑魚という名の雑魚』（前書き）

雑魚という名の雑魚はもちろん知樹。

第三話：『雑魚という名の雑魚』

うつす、神田知樹です。

相変わらず、苛められています。

特にオカッパから、あのオカッパめ…どんだけ俺が憎いんじや。

とか忘れて、今日は絶対の

「逃げ日和じゃ〜!!」

「まって〜ともちゃ〜ん」

めちゃ、ストーカーに追われています。

捕まったら、監禁されちゃいます、死ぬまでずっと…そんなの嫌だ

(泣)

「来るな〜」

「ツンツンしちゃって」

「してねえ」(泣)

と全速力で逃げてます。

ここまで、くりゃあ…大丈夫かな？（泣）

「兄貴」

「いや〜監禁生活は嫌〜（泣）」

「兄貴、私だよ」

きつと、すつげえ情けない顔をしてたんだろ。愛が俺の顔を見た瞬間…顔がひきっていたから。

「愛か…」と落ち着く俺。

「…あ……………しの…にき……………のに」

はい、なんか言いましたと聞いたら、顔を赤らめて、「な、何でもない」と言っつて走っつて行きました。

「なんだ？」

と疑問に持ちながら、はぐれた仲間をテケトーに探しに行くかなと思ひ、立ち上がると。

「みいーつけた」

(泣)
改ページ

俺をストーキングする女の名は『アイバラユキシロ愛薔薇雪白』。

たまたま、道に迷っていた雪白を助けたら

「貴方は運命の人」と言われた日から、ストーキングされるは、監禁されそうになるは追いかけるわ。

とにかく、怖いんです。

美女なのに勿体ない…あの性格と俺なんか惚れた事がなければいい。

ちなみに彼女の能力は『物の変換』というレアスキルを持つ。それで、容姿端麗、天才で生徒会長の雪白君から毎日 ストーキングを受けまくる俺。

ちなみに、体育なら雪白には余裕で勝ってます。

ハイ、体力馬鹿です。

「あと少し〜」

は？と振り向くと、雪白は自転車に乗ってます、しかも馬鹿でかいランチャーを担いでます…どんだけ腕力あるんねん！！

しかも、あれ(ランチャー)どう見ても、俺を狙ってるよ。

ヤバイ、絶対ヤバイぞ、あのランチャーは…逃げる、全力でにげ…

「ふあいや〜」

ドン…!!

やっぱり、無理。

ミサイルには、勝てない！！だって、ほら。

すぐ後ろにいたりするもの、ミサイル君（泣）

ダメだ、監禁生活が俺を待っていると諦めていたら、目の前から小枝が飛んできて、地面に落ちた。

「からみ樹急速成長」

投げられた枝が、急速に成長し、ミサイルを絡めあげる。

「はい？」

「大丈夫、兄貴？」

何故か、不機嫌な愛がいた。不機嫌…というか、殺気めいてる。顔に殺すと書いてあってもおかしくないぐらいに殺気がむんむん漂ってくる。

「兄貴、何処に行つて」

「は…い？」

「何処に行け！！」

俺は情けない事に妹の顔が怖くなって逃げ出した。

只走り続け、気付いたら古ぼけた神社にっていた。
そして、そこには田山と祇園が何故か居た。

「な、なに…なにや」

き、キツいんです。

幾ら、体育が得意でもこれはきつ……………え。

「カタカタタタ」

「ケ、ケケケケ」

俺は夢を見ているのだろう、二人の頭が180度周って、こちらをジツと見つめている。

こんな時は、これに限る。

「うわああああ!」

泣きながら叫んで逃げまくる!! (泣)

もう、これしかない。

これ以上のコメントはできない。

あ、一つあります。

「誰かゝ助けてー (泣)」

とその瞬間に正義の味方が茂みから…

「カッカカカカカ」

ですよー (泣)

人生そんなに甘くないよね (泣)

化け物が三体になった。

援軍だ！！

「ま

「助けてー」

「なんじゃこりゃ〜」って、同類かい（泣）「

逃げる、逃げるしかないのか（泣）

「あ、田山と祇園」

「あー、お前かよ」

「よっす」

雑魚同盟再集合。

「嬉しくな〜い」

どうなる雑魚同盟!?!?

第三話：『雑魚という名の雑魚』（後書き）

…ページ設定がうまくできません。

裏第一話 神田愛編 (前書き)

裏の話です。これは、知樹視線はありませんな、といやけで裏第一話 神田愛編 始まります。

裏第一話 〱 神田愛編 〱

初めて見た男の子が兄貴だった…。

裏第一話 〱 神田愛編 〱

朝：毎朝目を覚めると、恐い可能が浮かび上がる。

私は、さっさと制服に着替え、兄貴を起こしに部屋に入る。

「兄貴、兄貴、朝だよ…」

何度も何度も呼び掛けても、返事がない時は死にそうになる。

「兄貴！兄貴！兄貴！？」

「ふっがあ…」

なんだ…良かったと安心したら、苛ついてきた。

「起きろ〜!!」

「みゆみがあー!?!」

ムカついたので、兄貴の耳元で大声で叫んだ、近所迷惑なんてするか!!

「愛は俺を殺る気なのか(泣)」

全然、そんなことは考えた事がないよ…まあ、違う事なら何度か…
……。

私の家は、ごく普通の今時珍しい和風の新築一軒家（新築って言うても、買って一年）

今は両親は海外へ仕事でいないので、兄貴と二人暮らしをしていたりする。

嫌だと思った事は少ない、だって兄妹じゃない…だって双子じゃない…と色々と理由はある。

両親が海外に行く時、私も連れて行くと言った時はゾツとした…。
冗談ではない！！

こんな幸せをそんなことでぶっ壊されたくない！！！！

その時初めて両親を殺したいと思った。

最初は無理矢理でも連れて行くと言っていたか、母さんが何か感じたのか、急に

「ついて来なくていいよ？」と言い出した。

さすがにこれは驚いた、頑固な油污れなような頑固な母親があつさり来なくてもいいと言つので、驚いた。

父さんは最初は講義していたが、母さんの必殺の『あらあら、地獄を拝みたいの？』笑顔で父さんは沈黙し、それが二カ月前で現在にいたる。

「お……い……おい、愛……!」

「ひゃあ!?!」

「腹減ったよ〜(泣)」

いけないいけない、つい懐かしい思い出（と言っても二か月前）に浸っていた。

私は朝ご飯を作っていたんだっけ…と思い、兄貴を見たら。

「メシ〜（泣）」

と泣きながら、箸を両手に持ちながら顎をテーブルにつけ、ドンドンと足踏みをしていた。

あはっ、可愛いよ。

そうだ…言い忘れたことがあるな。

私は小さな小さく…兄貴に聞こえないように呟いた。

「お兄ちゃん、大好きだよ」と。

「愛〜メシ〜」

「わ、わかってるわよ!」

この幸せが永久に続きますように……。

裏第一話〜神田愛編〜

裏第一話 神田愛編 (後書き)

…はい、ごめんなさい。愛がこんなキャラで、こつこついう設定なんです！だから、石やめて石は(泣)

第四話：『人形と伯父』（前書き）

役立たずな雑魚同盟

第四話：『人形と伯父』

み、みなさん…

「こんにちわー！（泣）」

「キシヤ〜！！」

前々回のあらすじ。

- 1、ストーリーカーにあう。
- 2、妹とあう。
- 3、再びストーリーカーにあう。
- 4、ランチャーを撃たれたが、妹が助けてくれた。
- 5、逃げた
- 6、祇園と田山らしき奴とあうが。
- 7、敵でした。
- 8、また逃げた。
- 9、で、祇園達に会う。
- 10、雑魚同盟再集合！

てな、かんじです。

敵は、人形（パペリオット又はドール）と呼ばれる道具。人形師と呼ばれる役職があり、人形を造りそれに嘘の命を与え、自分の命令を聞かせるや命令を入力し、人形師でもなくても、人形を使えるようになる。

しかも、命令次第では…

ビュン！

「ちょ、殺傷命令型かよ!? (泣)」

様々な命令系統があり、その中で一番危険なのが殺傷命令型と呼ばれる人形だ。

殺人ありの設定で、これが結構危ない。

「田山!」

「なんだ!?!」

「奴等は土製だ!」

「!、おう」

そう、さっきソニックブームを放ったが、少し削れた。悲しいが、俺のソニックブームは土ぐらいは削れる。

土製なら…

「水がないや」…「ちょー!!」(泣)

「え、マジで?」(泣)

「水筒落とした」(泣)

「役立たず」(泣)

「キシヤ〜!!!!」

人形が一斉に飛び掛かってきた。

さらば…人生(泣)。

「ナチユラル・アロー！」
「変換、鉄！」

突如生えた木製の弓矢が現れ、矢を放つと同時に矢先が鉄に変換される。

矢はそのまま、土人形を貫く。

「へ…」

横を見たら、二人ほどたっていた。

「おに…兄貴！」

「ともちゃん！」

「大丈夫！？」

歩と雪白の二人が、一気に俺に接近し、安否を…

「つて、どいさわっとんじゃー！」

「え…どいっつ…」

「少々お待ち下さい」

「もう…触るなよ」

「っつ」

溜め息をつきながら、愛と雪白にお礼を言い、祇園と田山の安否を

確認。

「お前だけは味方だと思ってたのに〜（泣）」

と何故か、キレられ田山は全力疾走で学校に戻っていた……………。

俺達も学校に帰る事にした……………この時、気付かなかった……………俺を見詰めてる怪しい眼光に……………。

「はぁはぁ、ともたん…かわ…」

「気付くわ〜!!!」

脳天踵落しが炸裂!!!

変態にクリティカルだ!!!

「で、何しに来た」

「ともたんのかん

「殺すよ」…お小遣いあげに来たよ」

先程、俺を見詰めていた糞変態は俺の伯父であり、一応『魔王』のバロムだ。

昔は強いぞ！魔王バロム！！と言われていたが、今では部屋にこもり、スナック菓子を食べながらギャルゲーなどをしている、弱いぞ！ヘタレ魔王バロム！！になっている。

「さつさと、帰れヘタレ変態糞野郎」

「酷い！？（泣）」

こいつがいると、ろくな事にならない。

昔、魔王の手下と勘違いされ、勇者に追いかけてまわされた日々があるからだ。

「あなた」

「なんだい、美少女」

「爆弾になりたい？」

私のもちゃんから、離れてよ……さも……ないと」

「死んじゃうよ」

伯父の顔が、愛と雪白の脅しに恐怖している……お前、本当に魔王か
よ……………

このあと…伯父は二人連れて逝かれ、断末魔を聞いた…しらねえ。

第三話…完

第四話：『人形と伯父』（後書き）

はい、第四話終了。やっぱり、役立たずな雑魚同盟の皆様。そして、ヘタレ魔王のバロムも現れ、ヘタレ度加速し続けます！！

今頃なキャラ紹介（前書き）

一応メインだけでも

今頃なキャラ紹介

【名前】 カントトモキ 神田知樹

【性別】 男

【年齢】 15

【容姿】 黒髪黒目。

【身長】 168cm

【体重】 53kg

【性格】 あほ、ヘタレ、優しい？、雑魚

【種族】 能力者（雑魚）

【能力】 ソニックブーム、ソニックウェーブを出す。（威力弱）

【好きなもの】 辛子、高菜、竹輪

【嫌いなもの】 雑魚同盟、両親

【口癖】

「ちょ」、「絶叫系

【備考】 能力者として、名高い両親と祖母と祖父を持つ双子の兄。

祖父と祖母の子として、期待されていた父は律儀に期待に答えただめ、その子供と一時期世間で騒がれたが、能力のせいで世間、両親、周りの人間に見捨てられた。

両親が完全放任だったので、社交性や感情性などが豊かな極楽自由人間に育った。

【名前】 カントアイ 神田愛

【性別】 女

【年齢】 15

【容姿】 黒髪蒼眼

【身長】 132cm

【体重】

【性格】 （兄に対して）ツンデレ、頑固、強気

【種族】 能力者

【能力】自然操作

【好きなもの】あ…、ケーキ類、おにぎり

【嫌いなもの】猫、犬、父親

【口癖】

「なんで!?!」、

「雑魚兄貴」

【備考】知樹の実の双子の妹。

知樹に対して、キツく当たっているが本心は異常なまでの愛情を持つ。

昔から、独占欲が強いらしい。

兄とは違い、最初からBランクと世間や両親や従姉妹に期待されている。

小さい頃から、己の私欲のために、自分を必要とする周りの大人達やその子供とは違い、妹として一人の人間として必要としてくれた兄貴に惚れた。

最近、気にしているのはストーカー雪白と自分の身体の発育だと。

【名前】中瀬祇園ナカセキオン

【性別】男

【年齢】16

【容姿】女顔

【身長】152cm

【体重】39kg

【性格】友達想い、優しい

【種族】能力者

【能力】電撃を出す（威力はスタンガン）

【好きなもの】友達、パフェ、子犬/子猫

【嫌いなもの】嘘、祖父、黒く輝く閃光のG

【口癖】

「わかんない」、

「ふえ」

【備考】 知樹の親友の一人。

雑魚同盟の中で、一番優遇されている存在で、二人とは違い苛められない…というか苛めれるわけがない。

理由は多々あるが、ここ一番は祇園の親衛隊だろう…非公式の。

知樹が

「女だったら、惚れる」と言うほどに美少女に見える顔立で、初めて見た人は女だと勘違いされるほどで、痴漢にもあうほど。

小さい頃に、ちょっとした事件があり、それ以来知樹に懐いている。

【名前】 オホリタヤマ 大堀田山

【性別】 男

【年齢】 16

【容姿】 肩まである黒髪、金色の眼カラコンらしい

【身長】 175cm

【体重】 54kg

【性格】 楽道家、遊び人、M…

【種族】 能力者

【能力】 水を操る（一度に扱える水量は最大で水溜まり）

【好きなもの】 女の子、危険な香りの女性、巨乳

【嫌いなもの】 愛（怖い）、雪白（怖い）、なめこ

【口癖】

「俺は巨乳派だ!」、

「紳士だ!」、

「胸！胸！胸！..」

【備考】雑魚同盟の一番の変態で女好きで巨乳限定の知樹の親友二号。

小さい頃から、大きいものが好きで特に惚れたのが胸... ようは巨乳だ。

時折

「巨乳～」と叫び、よく警察に連行されたり、女性から冷たい視線を浴びる... しかし！そがいい！！と力説すると...。

知樹とは幼稚園以来の親友 【名前】アイバラユキシロ 愛薔薇雪白

【性別】女

【年齢】15

【容姿】腰まである黒髪、紅い眼

【身長】158cm

【体重】...

【性格】依存、明るいなど

【種族】特殊能力者

【能力】物の変換

【好きなもの】ともちゃん、ともちゃんの使用済みの物

【嫌いなもの】愛、ともちゃんに近づく奴等

【口癖】

「あはっ」

「ともちゃん、愛してる～」

【備考】美少女で勉強、運動、料理などなんでも出来て、しかも一年で生徒会長となんじゃこりゃ... と思うような少女。

しかし、ストーリーカー。

小学生の頃は根暗でよく

「気持ち悪い」と苛められていた。

一般世間からも、特殊能力者と気味悪がれていたが、知樹は覚えてないが、雪白を励まし最初の友達になってくれた存在。

それから、雪白は転校したが本人の努力で知樹と同じ高校に入学した。

今頃なキャラ紹介（後書き）

サブとかはいつか…

第五話：『体力馬鹿』（前書き）

段々だが、タイトルと内容があまり…関係ないような。

第五話：『体力馬鹿』

「神田ー！！追加十週だー」と叫ばれたのが、一時期前で今は追加合計五十周になっている。

基本体力馬鹿な俺には、キツくも何手もないが、大型トラックのタイヤ五個を身体につけて走るの、さすがにしんどい…。

あの糞豚猿の体育教師の誉田め…なんだよ。

ただ、追加された課題を苦もなくクリアしただけで、こんなことをしやがって………やめた、何時もの事だ。

「こらー！さっさとやらんかー！！」

へいへい、やりますよ。

やれば、いいんでしょうがー！！

「ちっ…もついい」

「は、はい…」

ハッハハハ、ざまーみる……こんな昨日に比べたら…昨日…なんか…。

「ともちゃん、タオル持ってきたよ」

……逃げるか。

と逃げようとしたら、目の前に男子軍がいた。

「……………」

「…ど

「血祭りじゃー！！」「ええー！！？」

な、なんですか！？

くそ、退路が絶たれたー！！前方は血涙を流す男子軍と後方にキチガイのストーカーが…どうする…どうする俺……右だ。

「知樹！行かせはせんぞー！！！」

田山ー！！

「邪魔だー！！！」

知樹の痛恨のリアット！！

田山は行動不能にだが！

「逃がすかー！！！」

不童子彰が道をふさいだ。

くっ、左だー！！

神田知樹は逃げた。

ひいひい、死ぬ…いつか…絶対奴等（男子軍）に殺される。

だいたい、俺が何したというんだ!?

俺は被害者だぞ!

ストーカー被害者だぞ、いくら美人でもあれはない。
しかし、そがいい!!

「って、なんでねん!」

「兄貴はMでしょ」

いつの間にか、後ろにいる妹が変な事を言ってきた。
Mは田山だよ!

「兄貴」

「なに?」

顎で後ろの大木から、黒い双眼のレンズが堂々ところらを見てたので、落ちてあるバットで。

「変態退散!!」

大きく振りかぶった。

「お目目がく!?!」

双眼鏡が眼に突き刺さったらしい。

木の人形から、いきよいよく転がり出たのは何処かに行ったはずの伯父バロムだった。

「なにすんの、ともたん!?!」

ともたん、ともたんとキモよ…この魔王バロム。

突き刺さった双眼鏡を引き抜こうとしているバロムに追い討ちをかけようとする妹。

「ハンマー」

木から木槌作られて、ドスンと重々しい音をたて、地面に突き刺さる。

よほど重くしたのか、引きずりながら、木槌を俺に渡した。

「とどめさせば」

…それもいいかもな。

「はっ!?!」

木槌を取ろうとした瞬間に伯父は気付いたのか。
双眼鏡が突き刺さったまま、何処かに逃げ出した。

「兄貴つてさ」

「うん?」

「よく捕まらないね」

「おお、体力はあるからな」

妹は溜め息混じりに、

「そう…」と呆れたかのように外方を向いた。

「もしかして…心配してくれたのか?」

「っ!…ち、違うわよ…そう…そうよ、からかう相手が」

「居ないとさびしいってか」

愛は顔から耳まで紅くして、

「違う違う違う」と連呼して走り出した。

なんだ…アイツ…と思い、教室に戻ろうとしたら。

「ともちゃん」
「知樹〜!〜!」

「いやー!〜!」

迫りくるは、鬼のような表情をした男子軍と眼に光が宿ってない雪白達です。

俺はまだ死にたくない！！

「死ぬ〜！！」

「愛してあげる〜」

「くんなー」

今日も絶好調にヤバい人生だ〜！！

一方…愛は。

「はあはあ、何言い出すのよ…」

愛は壁にも垂れかかり、息を整える…。

「…心配してるわよ、寂しいわよ…お兄ちゃんが居ないくなるのは嫌…」

遠くで兄知樹の悲鳴が聞こえる…助けなくちゃ…私のアタシの…わたしの…大切なお兄ちゃんを…。

私が助けなくちゃ…じゃないとお兄ちゃんは……。

お兄ちゃんは、母さんたちに処分される。

第五話：『体力馬鹿』（後書き）

知樹視点と愛視点でいい気がするが、やっぱり知樹視点で

第六話：『悪夢』（前書き）

今回はシリアスだと思います…多分。

第六話…『悪夢』

…玩具はどじこてる？

中々のできです。

ふん、そう言うなら『中々の出来損ない』…だろ。

はい…先生。

だいたい、何が嬉しくてこんなゴミを造らなければいけない!

それは…奥様が説明したとおりです。

…わかっている。

先生…そろそろ、お時間ですよ。

ああ…頼んだぞ。

はい…ちゃんと造ります…出来損ないの………を…

あの子の引き立て役のためにな。

…可哀相に、貴方は…の引き立て役として生まれ育つ。

それ以外の存在理由がないなんて……………そうだ。

君にちょっと細工しようか。

…に…の……………を組み込めば……………は……………る……………に……………
…わ……………さあ……………。

出来上がりだ…最高の『出来損ない』が。

夢…昔から、よく見る夢…途中で途切れる悪夢。

…早く起きないと、愛が起きて…蹴手操りまわされる。

昨日、パソコンでゲームをしていて夢中になってしまい。

ディスクの上に寝てしまってたけ…早く起きなきゃ、起きな
きゃ、起きなきゃ…捨てられる。

何を…だ。

エロ本とか？違う…もっと大切なものだったきがする…いつか。

俺は階段を降りて、台所にある材料を確認する。

人参…キャベツ…ネギ…麺…は、賞味期限今日までだった気がする。

…焼きそばでいいや。

造り終わると同時に、可愛いピンク色の生地にはヨコが無数に描かれた寝間着をきた愛が眠そつに眼を擦りながら、降りてきた。

しかも、枕を片手で抱きながらだ。

愛は、まだ寝ぼけてるのか…フラフラとした足取りでこちらに向かってくる。

可愛く面白いから、からかってやるつと近付く。

目の前まで来たので、脅かしてやろうとしたが…。

「お兄ちゃん…」

え……………。

「一人にしないで…」

！！？

俺が驚いた瞬間に、腕を俺の腰にまわし、抱き付いてきた。

相変わらず…何もない感触にも驚きながら、俺は思い出したくない記憶が蘇る。

十年前

「お兄ちゃん」

「!?、愛」

「え」

キーン…ドン…!

「お兄ちゃん…お兄ちゃん…一人にしないで…」

体は震え、奥歯をガチガチと鳴らしていた。

私はまただ！！と私は驚いた…この症状は此所最近見なかった…見
たくなかった。

兄貴は力なく倒れ、頭を抱え体を丸めた。

玄関から、騒音がする。

「愛！」

振り向くと、息を荒立っている田山と祇園がいた。

祇園達は、右隣りと向かいに住んでいる。

だから、兄貴の叫び声に気付き真っ先にこちらに来た。

祇園達に説明し、祇園達もまた

「またか…」という表情を浮かべたが、二人はさっさとその表情を
消し、兄貴を抱き抱えソファーに運んだ。

あれから、数時間後… 兄貴は落ち着いて、今は寝息をたてながら爆
睡している。

治った思っていた兄貴の症状に私達は絶句する以外なかった。
私達が知っている兄貴が忘れたい過去はどうすることもできない。

私達はただ絶句した。

〈知樹視点〉

目を覚ますと、泣きながら愛が抱き付いてきて、俺に平謝りした。
何故かいる、祇園達は何か安心したかのような表情を浮かべたので、
理解把握した…俺はまた………。

この後、祇園達が帰っても夕食の時も俺から愛は離れようとしなかった。

…トイレと風呂の時は大変だった…。

愛のせいではないと何回宥めても、愛は首を縦に振らず横に振った。

駄目だ…こりゃと思ったのは寝る時で、愛は一緒に寝たいと言い出しました。

一生懸命にダメだと言ったが否定…拘束された。

さすがに諦めて、数年振りに愛と一緒に寝た…その時だ愛が俺の手を握り締めたが、それは弱々しく小さかったことを覚えている。

俺は愛の頭を撫でながら、目を瞑り睡魔にまかせた。

ああ、なんで…なんで…あんな事になったんだろっと思いつつと
したがやめた…やめだ、やめだ。

寝よう……………。

く完く

第六話：『悪夢』（後書き）

今回ギャグ少なめです。そういえば、皆様ほどのキャラがお好きですか？いや実は…今度の裏第二話のキャラを誰にしようか悩んでいて…出来れば御協力を、協力と言っても、誰がいいか教えるだけで結構です、はい。では、また。

第七話：『赤い過去』（前書き）

…ギャグ少ない（泣）

第七話：『赤い過去』

「……」

夢：限り無く悪夢に近い夢にうなされ、飛び起きたらシャツは汗に
滲んでいた。

愛を起こさない様に立ち上がる。

また…夢をみた、二日連続だな………しかし、今回は違った。

楽しい何かの集まりに、色んな人がいた。

懐かしい友人から初恋の人や先生などたくさんいた…楽しかった
○○の誕生日兼お別れ会だ。

それは懐かしくも微笑ましい風景であった…違う、だっただ。

楽しい風景は一瞬で紅く染まった…地も紅い…背景も紅い…紅い赤
い世界。

そして、その世界で不気味に佇む少女がいた。

少女は体を赤く染めていた…色んな人の血で、友人から初恋の人…
果てには先生や住民の血で、自分が放った炎を背を向け、赤い少女
はニタリと笑い、呟いた。

『ともちゃん…愛してる…』

少女は呟くと歩き出した…他の外敵を駆除をするため…少女は歩ん
だ。

汗だくは嫌なので、シャワーでも浴びようと部屋を出ようとしたら。

「兄貴…」

愛を起こしてしまった…と思い、謝ろうと振り向くと……………そこには、知らない少女がいた。

確かに確かに愛だ…しかし、愛と思われる女子からは禍々しい感じが漂い、目には光が宿っていない。

愛らしき者は、光のない目で俺を見詰めた。

鳥肌が立つ…その目で見ると恐怖が噴水のように吹き出す。

「何処に行くの？」

愛らしき者は、俺に質問した。

「し、シャワーを浴びに…」

愛らしき者は

「そう」と納得すると、布団の中に潜り込んだ。

…な、なんだ…さっきのは、あれは愛なのか…と考えながら、風呂場に向かっていたら。

「!？」

角に小指をぶつけた…悲鳴に鳴らない激痛に悶え苦しみ、跳ね回る

と今度はぶら下げてあったフライパンに顔が直撃する。

再び苦しんでいると、こけて頭を強くぶつけ……意識が飛んだ。

（愛視点）

兄貴が中々戻らないので、心配になり風呂場に向かおうとした途中…肉を踏む感触が足に伝わった…。

下を向くと上半身裸の兄貴が大の字になってのびていた。

「兄貴〜！」

（祇園視点）

愛ちゃんの叫び声が聞こえたので駆け付けてみると、知樹の上に馬乗りし、高速の往復ビンタをする愛ちゃんがいた。

奇怪な絵図に停止してしまい、愛ちゃんが往復ビンタを加速させるのを見て、流石に止めた。

愛ちゃんを止め、知樹の顔を見たら頬は見事に腫れ上がり、頬は痛いし青色になっていた。

数分後：知樹は

「漢祭りはいやー！」と泣きながら、起上がり何故があったフライパンに頭を強くうち、再び眠った。

この後、25回ぐらい変な事を叫びながら起き、何故かあるフライパンに頭を打ち気絶するを繰り返した。

多少呆れ気味になりながら観ていた…何故かって………楽しいからさ。

たまにはこういつのもいいと思う。

きつと…うん…多分。

（知樹視点）

起きたら、頭と頬に痛みを感じた。

愛は安堵の笑みらしきものを浮かべた後に激怒された。

それをクスクスと笑いながら、見る祇園が恨めしく思った。

色々と話を聞いたら、穴に入りたくなつた…恥ずかしいよ…俺。

祇園は用事があると家を出ようとしたら、愛も用事があると一緒に家を出た。

ちなみに田山は街に繰り出し、ナンパ巨乳研究同好会（非公式）の任を全うしてるらしい…馬鹿だろうアイツと思いつながら、ポストを見たら…一通の手紙があった。

それはバトルアクションの挑戦状だった。まじか、しかも宛先は家で書いてあった名前が『神田知樹へ不童子彰様より』だった。

く完く

第七話：『赤い過去』（後書き）

視点チェンジが激しいぜ！！でも…基本はやっぱり知樹視点です。

第八話：『修羅場（改）』（前書き）

修羅場加速

第八話：『修羅場（改）』

どうも、神田知樹…ピチピチの高校生！！

と…言いたくなるほど、現在……

「何処かに行つてよ」

「貴女が逝けばいいじゃない」

「あら、気のせいかしら…行けの言葉が逝けに聞こえたけど」

「気のせいです…色々小さいから小さいことも気にし過ぎです。」

「ええ、すいません…あ…胸についてる者が邪魔で貴女が見えませ
ん、存在も」

「うっふ、うっふふふ」

「あっは、あっははは」

「はっはははは」

なんだろう、この空気……すぐく居にくい。

二人から、殺すぞと言わんばかりの殺気がこちらに迫る。

く、こうなれば…！

「田山ヘルプ」

「嫌だ」

「ヘルパー祇園」

「ごめんね」

「通りすがりの皆さん」

「嫌」

「先生は登校と下校中がこんなんでいいと…」

「関わりたくない」

と親友に見捨てられ、通りすがりの皆さんは冷たいし、先生は関わりを拒否。

冷たいぞツンドラの大地のように！

ツンデレのツンのようにい！！

冷たいぞ、ツンツンし過ぎだよ。

「兄貴」

「ともちゃん」

「はい！？」

気付いたら、昇降口前だった…俺土足だ。

靴から上靴に履き替えても、状況は変わらずに徐々に負のオーラを集めてる。

駄目なんだぞ、オーラ○トラーは負の感情で動かしてはイケないんだぞ！！

教室…そうだ…教室にいけば！！！！

「忘れてた…」

「何が？」

と聞いてくるのは、俺の前の席の中瀬祇園。

そう…忘れてた。

雪白は俺の席の右で、愛は俺の席の左だった。

くそ！こんなことだったら、最初から席を男子軍にオークションか
けとけばよかった。

「兄貴」

「なに？」

「教科書忘れたから見せて」

「え、でもお前今日」

「み・せ・て」

知らないけど、すごく機嫌が悪い愛……………。

「ともちゃん、私にも見せて」

はい？なんて言ったの？

というか、その手にある教科書はなんですか？

「…なんのことかな」

雪白は近くに居た男子生徒に教科書を凄いい勢いで投げ付けた。そして、雪白が投げた教科書に群がり殺到する男子軍の下敷きになる男子生徒は哀れだ。

(後でソーダでも奢ろう)

しかし…この時気付かなかった……更なる恐怖と修羅場が来る事なんて、死亡フラグ建ちまくりの俺は知る素手を知るわけがない…誰か助けて……。

こういう時に限って担任が中々来ない、いつもなら空気読めよと言いたくなるタイミングで来るくせに。

四方八方から、いつもの怨念や嫉妬などの視線は感じられず、

「ざまあ」

「いい気味だ」

「可哀相」等々と様々な視線が浴びさされる中で、未だに居心地が悪い。

泣こうかと悩んでいると廊下で何か楽しい会話が聞こえる。

誰だよ…人がくるしんでいるのにと妬んでいたら。

「すまん。遅れた」

「お前か…い！…！」

「うわぁ！？」

能力育成学先生兼一年E組担任の『閻魔小太郎』エンマコタロウだった。
担任は俺が叫んだことに驚いた。

「び、びっくりした〜」

「遅い！遅すぎるー！！」

そうか〜という顔で袖を捲り、腕時計を確認した。
すると、あ…といわんばかりに口を開けた。

「あっははは、めんじゅ」

「なんちゅー、謝りかただ！？」

「じゃあ、ごめん」

「ムカつくー！！」

「ふむ…御免」

「なんかちが〜う」

「…ふう」

「溜め息つきたいのはこっちじゃー！！」

端から見たらコントをする漫才師に見えもなくもなかった。

「さて、五月蠅いのも黙ったし」

何故か、教室の床にキスをする知樹とその床にキスをしたがっている雪白を余所に普通に出席を取る担任。

(馬鹿兄貴…)

因みに知樹を教室の床にキスをさせたのは愛です。理由？恥ずかしいだからじゃないと思う。

(だいたい、漫才なんてアタシだけで十分じゃない)

何か違うみたいです。

愛は溜め息をつき、ふと兄知樹を見て見たら。

「…ん」

「あら、何やってるの」

「ドツキ!?!」

知樹に唇を突き出し、接近する雪白がいた…というか誰か止めるよ。

愛は素早く知樹を雪白から離すと、雪白はチツと舌打ちをし、知樹が先程唇をつけていたタイルを取り外した。

持って帰る気らしい…。

愛は知樹の名前を呼びながら、往復ビンタを激しく強くした。

「うわぁ…」

見る見るうちに知樹の頬は赤くなり次に青く腫れ上がった。

前の席から見てる祇園は痛いしい顔になる親友を哀れに思った。

「…痛い」

「ごめんなさい…」

見事までに頬が腫れ上がった時に起きた知樹は

「厄日だ」と思いながら、祇園から濡らしてもらったハンカチを両頬に当てていたら、真横から嫌々視線を感じた。

「まあ、神田知樹は置いて置いて」

「先生、神田君を保健室に連れてって良いですか？」

とまともな意見を言う雪白に少し感動した知樹とうさん臭そうにみる愛。

「本音は？」

「ともちゃんを襲って、脅して結婚するため」

愛の簡単な訊問誘導に糸も簡単にかかる雪白。

知樹の中で先までの感動した心は見事に粉碎した。

「…しまった〜！」

馬鹿みたいに訊問誘導に誘導された雪白は嘆いた。

そんな、雪白を無視して愛が知樹に提案する。

「兄貴、アタシが連れて行くよ」

「…何もしない？」

愛は軽くビツク！として、笑顔で

「し、しないよ」と答えたが、知樹は信用ができずに寝た。

「え、兄貴!？」

「貴女も同じじゃない」

知樹は寝たかった…現実逃避がしたかった。

忘れてた担任は咳払いをし、二人を黙らせた。

「今日転校生が来たぞ」

知樹は起きた。

知樹は浮かれた、ほんの5コンマぐらい。

彼が気付いた時には、白い手が首を握っていたから。

雪のように真っ白な手は愛薔薇雪白のモノだとすぐに理解した。

人生の中でこれほど白い手と冷たい手を持っているのは雪白以外ないのだから。

「とーもちゃん」

「何かな？」

少ししづつ絞める強さを増して逝く雪白と徐々に顔が青くなって
逝く知樹。

「まあ、神田はほつといて…転校生を紹介しよう」

助けるよ。と死にそうな知樹は泣いた。

愛は全力で知樹を助けた。

「では…転校生御入場」

噓せながら、

「結婚しきかよ」とツツコンだ知樹と結婚式か〜と妄想する愛と雪
白。

一人の女子生徒が入って来た。

「転校生の雪原弓誓です」

神田知樹は、絶句した…ただ奇跡に絶句した。

「久しぶりだね、ともくん」

「ゆーちゃん…」

〈完〉

第八話：『修羅場（改）』（後書き）

新メインキャラ登場で物貰い貰いました（泣）

第九話：『早すぎる展開』（前書き）

ごめんなさい

つづく。

知樹は昼休みに閻魔に呼び出された。

久しぶりに再会したゆーちゃん（雪原）と食事をしようとしていた知樹にとっては、最低な呼び出しだった。

「…何これ」

神田知樹は数少ない友人の閻魔小太郎から渡されたプリントに疑問をもった。

「何って…テスト」

閻魔小太郎は一応神田知樹がいる一年E組の担任である、担当は歴史。

閻魔とは近所付き合いの仲の良い友人関係。

「テスト…これが？」

知樹は困惑気味の表情を浮かべながら、先程からニコニコと笑う閻魔に聞いた。

「うん！」

生で聞いたら、たまったもんではないらしい。

閻魔の喉には高超音波を弱める装置がつけられてるが、あまりの高超音波のためあまり役に立たないらしい。

下手したら、頭が破裂してジ・エンド だから恐ろしい。

…そうそう、言い忘れたが装置をつけて、やっとで頭が破裂するかも知れないだと。

迷惑な話だよ…本当に。

知樹が色々と苦労している頃、教室では。

「…」

「…」

雪原弓誓と愛薔薇雪白が睨み合っていた。

何かの因果か、二人の席は隣りだったりする。睨み続けて数十分だったが、一向に進展がなくお互いニコニコと笑っている。二人は自分の弁当には一口もつけてなく、睨み合い笑っている。

そして、一人の女子生徒（愛）が席を立った刹那に火蓋を切ったのだ。

「ともくんは私のモノよ」

「いつ、君のモノになったんだらうか…」

「生まれた瞬間からよ」

「馬鹿じゃない？、ごめん…馬鹿だったね」

「い、言ったわね…」

「言ったわよ…」

言い争いを聞いていて、阿呆らしくなる愛となんかなくと思う生徒達。雪白は覚悟をした…アイツを雪原弓誓を殺害することを。

「…」

雪白の顔はこれまでにない憎悪に満ちていた、憎い憎いと叫び続ける本能に忠実に従っていたが弓誓の一言で始まる。

「相変わらずだね、人殺しさん」

弓誓は細く微笑みながら、雪白を人殺しと呼んだ。はい？と思った生徒達とバレたかと思う愛とただ絶句する雪白と運悪く帰って来た知樹だった。

「何言ってるの…」

「真実だよ、君が隠したい真実だよ。」

雪白の白い顔は青ざめてゆき、より白さを増しって行く。弓誓はその表情を見たのを確認すると勝利を確信した。

「わ、わた…しは」

「本名は義月雪白。ともくんとは親戚関係で異常なまでの愛情をともくんに持っていた…それをあらわにしたのは君の誕生日会だった。君はその力『物の変換』能力を使い、君の両親と住民…果てには学校の友人と先生を大量殺害したのが紛れもなに真実だよ。」

長々しく語る弓誓が言う真実に驚愕する雪白と知樹を哀れそうに見てしまう愛は微かに笑った。

「一つ…訂正したい、君の能力は」

「言うな…言うな」

「君の能力は『狂愛』」

禁忌の能力と唄われた『狂愛』。

過去にあまりに協力すぎるという理由で『能力者判定協会』はこの能力を禁忌とし、この能力を持つ者を根絶やしを決意したが失敗して逆に『能力判定協会』が根絶やしにされるといふ悲劇となる。しかし、当時の『狂愛』能力を持っていた者は世界中の軍を使い根絶やしに成功するが、代価は戦力を半分以上も消費した事だった。それ以来『狂愛』能力は現れなかった…現れるはずがなかったのだ、一人の例外を残して。

その例外…イレギュラーが愛薔薇雪白…義月雪白なのだ。

〈完〉

次回予告！

知樹が聞いた真実は知樹の過去をえぐり出す。それを好機と見た童子彰は知樹に勝負を挑むが、知樹のうちに秘めていた力が狂喜を呼ぶ！！

次回狂喜青年『知樹』最終回『殺戮』その狂喜の果てには未来はない…。

「どっ？」

とまた長々しくしかも勝手に俺を使った阿呆担任に悲痛の一言を満面の笑みで送る知樹。

「ボツ！！」

「本当に完」

第九話：『早すぎる展開』（後書き）

反省の色なさそうな小説でごめんなさい。これでもちゃんと頑張りました、夏目漱石や涼宮ハルヒを読みました。

裏第二話 雪原弓緋 (前書き)

裏第二話

裏第二話 雪原弓番

ともくん…僕との約束覚えてる…かな？

僕は覚えてるよ、君と交わした素敵な約束を少し物足りない約束を覚えてる。

昔に比べて凄く良い…昔も良かったけど今の方がより良くてまた君に惚れてしまったよ…君は罪人だ。僕を何度も何度も惚れ直させるなんて、君のおかげでどんなにいい男だってゴミに見えてしまう。

君との約束を果たす為に僕は今まで生きてきたし、両親も………したよ。すべては約束のために…

十年前

引越しの日の当日に両親に引越しを告げられた僕は泣いた…泣き叫んだ。両親は僕を無理矢理に入れたので僕は車の窓から顔を出して、涙目になりながら泣きながら来てくれたともくんを見詰めていたが無残にも両親が車を出した。

ともくんは走った…必死に走ってきた。こけながらも体に擦り傷ができて顔から鼻血をだしてもともくんは走ってくれた…凄く凄く嬉しくて泣いてしまった。そして最後にともくんは言った…『こんど…ま、またあ、あ、あえたら……僕の…かの…彼女に……なっ…!?!』そこまで言ってもくんは豪快にこけた。けど起上がり叫んだ。

『僕の彼女になってください!!!』

嬉しくて嬉しくて泣いた…本気で泣いて答えた。

『うん!!!』

そして…ともくんは見えなくなった。

あれから、ともくんと約束を胸に秘め、約束を力に 誇りに変えて生きてきた…だから…だから。

一緒に居ようよ…ずっとずっとこれからずっと僕だけのともくんとしてね。

裏第二話 雪原弓緋 (後書き)

こんなもんですみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092f/>

ええ、どうせ...雑魚のCランクですよ！

2010年10月14日17時21分発行